

喜界島の歴史と農業の発展

～地下ダムの恵みは新たなステージへ～

花田 潤也

九州農政局 南部九州土地改良調査管理事務所
計画課長
HANADA Junya

1. はじめに

喜界島は鹿児島から南南西に380km離れた洋上に浮かぶ奄美群島の島嶼である(図-1)。文献には鬼界島、奇界島、貴海島等の数々の名称が記録されているが、1645年頃に「喜界島」という名称が現れ、その後は鬼界島・喜界島の名称が併用されているうちに縁起のよい「喜」という字が定着したとされる。

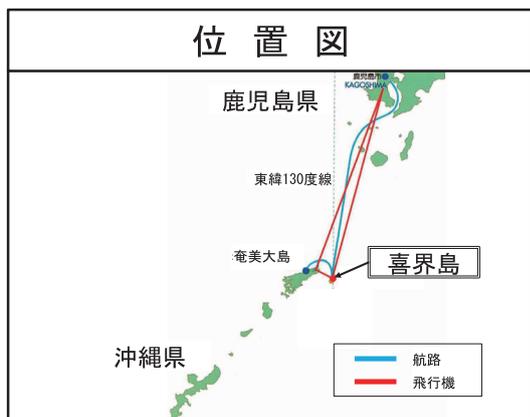


図-1 喜界島の位置図

喜界島は農業を基幹産業とする島であり、島面積の37%が耕地、就業人口の24%が第1次産業従事者である。保水性が乏しい地層で台風常襲地という営農に厳しい条件であるが、国営土地改良事業喜界地区(H4～H15)により地下ダムが整備されたことを契機に、日本一のゴマの産地に成長し、温暖な気象条件を活かした先進的な農業が可能となっている。本報文では、農業を基幹産業とする喜界島の歴史と今後の展望を紹介する。

2. 喜界島における集落の発生(シマタテ)

12～13万年前は喜界島が島として存在しておらず、現在の最高峰(標高約200m)である百之台周辺が10万年前頃に海面上に姿を現し、隆起により次第に面積が拡大して今日の姿になっ

た。毎年約2mmという世界的に珍しいほどの隆起速度は今も続いており、学術的にも注目を集めている。

喜界島では赤連遺跡や荒木貝塚等が発見されており、約6千年前には人が住んでいたとされている。原始から9世紀前後までは「奄美世(アマムユ)」と呼ばれ、御嶽(ウタキ)を中心に集落(シマ)が発生し、男性が行政を、女性が祭りを担当して、同族的血縁関係により相互扶助する共同社会の時代であった。姉妹(ウナリ)の霊が兄弟を守護するとされる「ウナリ神信仰」の文化は、その他の奄美・沖縄地域においても見られている。

8～9世紀頃から次第に按司(アジ)と呼ばれる首長たちが勢力を蓄え、「按司世(アジユ)」と呼ばれる階級社会が13世紀頃まで続いたとされる。喜界島を一望することができる百之台は、当時全島の按司たちが会議をした場所とされている。この時代には①源為朝漂着と雁股の泉伝説(保元物語)、②俊寛の鬼界島配流(平家物語)、③源頼朝の貴海島追討(吾妻鑑)、④平家落人伝説(平家没落由来書)等の逸話があり、壇ノ浦の戦いで入水したとされる安徳天皇が実は南海に逃れていたという説がある。これらの伝説に関連して、喜界島には「平家森」という森があり、奄美大島には平家を祀る数々の神社が存在する。また、平家一族の教化の名残で喜界島・奄美では都方の礼儀作法、風俗、言葉などが今なお豊富に保存されているともいわれている。

3. 琉球・薩摩への従属の時代

1466年に琉球王国第四王朝第七代尚徳王が率いる約2,000人の遠征軍が喜界島を征服し、那覇世(ナハユ)と呼ばれる従属の時代が始まる。琉球王国は喜界島を5つの間切(行政区画)に分割

して島出身の地方役人を登用し、間接支配による統治を行った。

1609年からは薩摩藩(島津氏)により琉球・奄美が支配された大和世(ヤマトユ)と呼ばれる時代である。1623年に薩摩藩は「鬼界島置目条々」により奄美の島々への統治方針を明らかにし、代官を最高統治者として島役人の権力を制限し、薩摩藩以外の外界から隔離するために造船を禁止することなどを定めた。1691年頃に中国から沖縄経由で奄美にサトウキビが伝わったことを契機に、1695年に喜界島・大島に黍(キビ)検者が配置され、「砂糖地獄」といわれる薩摩藩による搾取が行われた苦難の時代が始まる。1713年に最初の砂糖買上制である「第一次定式買入制」が施行され、島民はサトウキビを強制的に栽培させられ、藩に決められた値段で一定量を差し出さなければならないこととなった。1745年には「換糖上納制度」が実施され、奄美の人々は税を全て黒糖に換算して納めることになる。1777年には、「第一次惣買入制」により、島民は黒糖の私的売買が禁じられて全ての黒糖を藩に納めることとなり、島民へは対価として日用品を相場よりはるかに高い黒糖換算の値段で渡すという搾取構造が始まった。黒糖を密売した場合は厳罰が課され、税を払うことができない場合は自分の身を売って家人(ヤンチュ、喜界島ではヌザー)と呼ばれる農奴になり、身代糖と呼ばれる身売り金の返済を行った。明治維新において、薩摩藩が幕府に匹敵するほどの財力を得ることができた背景には、「薩摩77万石」の外数である南西諸島の砂糖による収益があったとされる。

4. 近代とアメリカ世(アメリカユ)の喜界島

1868年の明治維新により、ようやく奄美の糖業は薩摩藩による搾取から解放されて念願の自主糖業が可能となった。しかし、当初は国や県に適切な営農指導や施策がなく、サトウキビ生産量は藩政時代を下回っていたため、優良品種の奨励普及、大島糖業試験場設立等の振興施策が講じられた。大正初期になってもトラクター等は普及しておらず、サトウキビ生産は全て人力と馬による過酷な労働であり、収量は現在の

4割程度であった。製糖作業は3、4戸ほどの農家で製糖グループ(サターヤマグミー)を作り、小さな製糖用の小屋(サターヤー)を構えて共同で営んでいた。大正8年には喜界島でサターヤーが743箇所あり、敷地中央には馬を動力とするサトウキビ圧搾機(クンマ)が備え付けられた(写真-1)。クンマでは1反歩のサトウキビを処理するのに1週間ほどかかるとされている。大正末期から昭和初期にかけて、石油発動機を動力とする最新型の圧搾機が一部で導入されるも、間もなく戦時体制へと突入して石油が入手困難になり、元のクンマへ逆戻りした。



写真-1 クンマによるサトウキビの圧搾

太平洋戦争中は、喜界島にあった海軍飛行場が特攻隊の中継地点となった。沖縄に向けて決死の飛行に飛び立つ若き特攻隊員達に、島の娘達が情を込めて天人菊(テンニンギク)の花を贈ったことから、天人菊の花は「特攻花」と呼ばれ、今でもかつて海軍飛行場だった喜界空港周辺に咲き誇っている。沖縄戦が開始されると喜界島は日本本土防衛の最前地となり、本土との交通は途絶して激しい空襲に見舞われ、総戸数3,931戸の内1,910戸が焼失もしくは倒壊、空爆等による死者数は119名に上った。

太平洋戦争終結後は、本土から行政分離され、米軍政府下に置かれたアメリカ世と呼ばれる時代に入る。行政分離によって本土との航行が全面的に禁止され、本土からの米の輸入も自由にできずに食糧難であったことから、主食としてのサツマイモと米の作付が増加し、喜界島民の換金作物であったサトウキビの作付が激減した。サンフランシスコ講和条約の翌年である昭和28年12月25日の午前零時は、米国にてクリス

マスプレゼントとも称された奄美群島の本土復帰の瞬間であり、島民が長年の従属の歴史から解放されて真の自由と誇りを取り戻した歴史的瞬間であった。

5. 戦後復興と奄美振興について

本土復帰から間もない昭和31年に、町村合併促進法の適用により喜界町と早町村が合併し、現在の喜界町が誕生する。奄美群島は甚大な戦争被害と8年間の行政分離により本土と比較して著しく発展が遅れていたことから、昭和29年に「奄美群島復興特別措置法」及び「復興計画」が制定され、「生活水準をおおむね戦前(昭和9年～11年)の本土並みに引き上げる」とされた。昭和34年に生和糖業の操業開始によって農工分離となり、これまでサトウキビ生産と製糖の両方を担ってきた農家は生産に専念できるようになった。昭和39年には住民の生活水準を鹿児島県本土の水準に近づけることを基本方針とする「奄美群島振興特別措置法」及び「振興計画」が制定され、主要産業と明確に位置づけられた糖業の育成により、サトウキビ優良品種であるNCO種の導入、農協の一元出荷、畜力からハンドトラクター利用への転換等によって、サトウキビ生産が一段と躍進した。昭和45年には全農家の90%以上がサトウキビ栽培に従事しており、島の経済を支えるサトウキビは「奄美の生命線」とまで呼ばれるようになった。

このころ最も恐れられていたのが貿易自由化であり、安価な外国産の砂糖が自由に国内市場に流入した場合、砂糖価格が暴落して離島で生活を続けることができなくなる。日本政府は昭和38年にGATT11条国となり、先進国の一員として貿易自由化が義務付けられたが、関税障壁によりサトウキビと離島の生活を支えることとして、昭和39年の「甘味資源特別措置法」及び昭和40年の「砂糖の価格安定等に関する法律」等の関連法案を制定した。この枠組みは改正を重ねて現在まで続いており、平成27年10月5日のTPP大筋合意でも現行の糖価調整制度を維持することとされている。

昭和49年には、依然として本土との著しい格差が存在することから、「奄美群島振興開発特

別措置法」及び「振興開発計画」が制定された。同法律は一部改訂と5か年ごとの計画見直しを繰り返しながら、今日の振興開発計画(平成26～30年度)まで続いている。同振興開発計画は、①地域主体の取組推進、②定住促進、③交流拡大、④条件不利性の改善、⑤生活基盤の確保・充実、の5分野の施策を展開するとしており、定住促進にかかる重点3分野として第1に農業、続いて観光業、情報通信業を位置づけている。

6. 地下ダムによる畑かん農業の実現

以上のように、喜界島の振興は農業振興と一体不可分であるが、喜界島には年間降水量2,000mm以上の豊富な雨水があるにもかかわらず、厚さ20～40mの保水力が乏しい石灰岩の地層が農業の発展を妨げてきた。しかも7月から10月の降雨は、そのほとんどが不規則かつ集中的な台風による降雨であることから、豊富な雨量を十分に活用することができず、台風が少ない年には長期の干天に見舞われてしまうため、トラックかん水の重労働と不安定な農業経営を余儀なくされてきた。

時期を同じくして、同じく平坦な隆起サンゴの島である沖縄県宮古島において、昭和54年の皆福地下ダム(総貯水量70万 m^3)完成により、地下ダム構想が技術的に実証された。このような背景より、奄美群島振興開発事業の一環として昭和54年から地下ダム開発調査が実施され、その結果、喜界島は宮古島に劣らない地下ダム建設適地であることが判明した。昭和61年から4ヶ年かけて喜界島で地下ダム試験施工が実施され、地区調査・全体実施設計を経て、国営土地改良事業喜界地区(平成4～15年、事業費252億円)が実施された。喜界地下ダムの一部は、保護蝶オオゴマダラ生息地である砂丘防風林を保護するために、全国で初めてトンネル内から止水壁を施工する工法を採用した(図-2)。トンネル内は完成後も一般見学可能であり、窓から地下水と石灰岩を観察できる教育資源として、年間約1,900人が訪れている。平成12年8月8日より喜界地下ダムから畑地かんがい開始され、また、平成24年度に関連事業が全地区完了したことにより、喜界島の農家は重労働のか

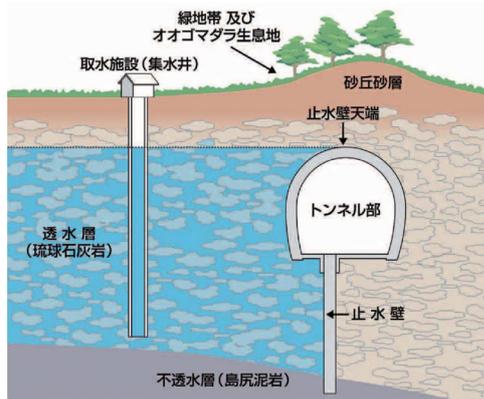


図-2 喜界地下ダムトンネル部の概念図

ん水作業から解放されたとともに、サトウキビの適期の植付等の計画的な営農が可能となった。特に、園芸作物については温暖な気候を活かして、国産野菜が品薄になり市場要望が高い端境期に出荷可能(表-1)となり、また、ゴマに関しては播種時の散水により初期生育が安定化し、日本一のゴマ産地(国産シェア約7割)へと成長した(表-2)。関連事業で整備された「サ

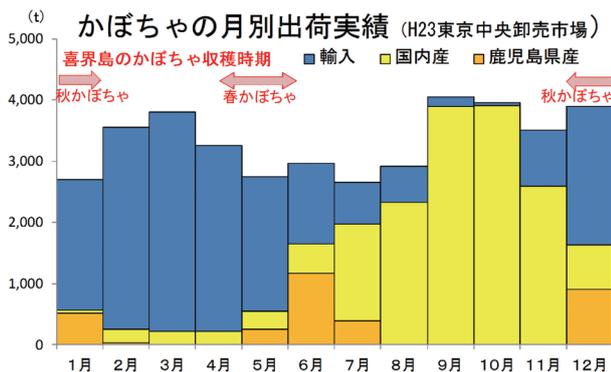


表-1 国内産かぼちゃの端境期

農業産出額の推移

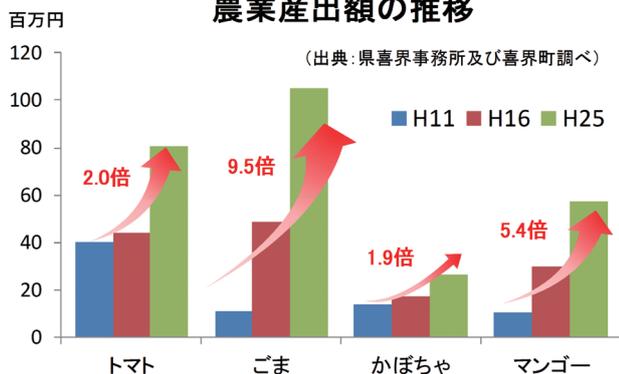


表-2 喜界町の農業産出額の推移

トウキビ畑の一本道」も重要な地域資源であり、見渡す限りのサトウキビ畑と青い空、海へと続く一本道を背景に、跳躍して写真を撮る観光客も多いという(写真-2)。



写真-2 サトウキビ畑の一本道

7. おわりに

喜界町(川島健勇町長)は、第5次後期総合振興計画(平成28年4月)により、限られた島面積で農業による更なる地域振興を推進するために、サトウキビの単収増加と有機黒糖による高付加価値化の推進に加えて、園芸作物を推進する目標を定めて、育苗支援、生産資材補助、営農技術指導、カボチャ選果機導入、製氷機整備、トウガラシ工場誘致等の様々な施策を実行している。

また、平成28年4月から、喜界島のほぼ全耕地を受益面積とした次期国営事業の地区調査に着手しており、新たな地下ダム構想の検討と合わせて、自律的で魅力ある地域社会【まち】の創出、多様な人材【ひと】の確保、多様な就業機会【しごと】の創出を合わせて進めていく方針としている。

過酷な自然環境と苦難の歴史を乗り越えて、先進的な農業を実現した喜界島の地下ダムの恩恵は、新たなステージに入ったといえる。喜界島はこれからも「小粒でもきらりと輝くいい島」を目指して、更なる発展を続けていくことだろう。

(参考文献)

- ・喜界町誌, 喜界町, 2000
- ・水土の礎 (喜界農業の明日へーあちゃやはれ), (一社) 農業農村整備情報総合センター, http://suido-ishizue.jp/kokuei/kyushu/F1/F2/Kagoshima_Kikai%20nogyo.html
- ・国営喜界土地改良事業事業誌, 九州農政局喜界農業水利事業所, 2003
- ・日本の砂糖を支える仕組み, (独) 農畜産業振興機構, <https://www.alic.go.jp/content/000075772.pdf>
- ・TPP 関連情報, 農林水産省, <http://www.maff.go.jp/j/kanbo/tpp/index.html>
- ・奄美群島振興開発事業と今後の動きについて, 国土交通省, <http://www.mlit.go.jp/common/000189039.pdf>
- ・宮古島における農業用水開発の歴史と農業水利施設の継承, 花田潤也, 水土の知 82 (11)P859-862, 2014